

# 教育実践報告 —— 「のりものではたらく人たち」

黒石市立上十川小学校

白戸 順一郎

## I はじめに

1年生の家庭や学校といった、児童が密接にかかわりを持つ社会環境への興味や理解と、2年生の近隣社会でみかける程度の働くおじさんへの興味や理解とでは、大きなギャップがあるのが普通である。そこで、ともすると、1年生の家庭や学校での働くおじさんとはちがって、2年生の子どもたちにとっては、働くおじさんへの興味や関心がうすく、なかなか現実のイメージとはかけはなれた授業になりやすい。

そこで、ここでは「2年生の子どもの生活・子どもの願い」を底辺にしっかりとおいて、一方では指導要領の目標と内容をよく吟味しながら、見学や観察により事実・事象を見つめさせ、その前後指導を大切に学習、授業づくりのための試みを考えてみたい。

また、子どもの生活・願いを大切にしていくと、現に使用している教科書をどのように効果的に扱うかという問題も重要なことである。

いずれにしても、今自分で担当している子どもに「のりものではたらく人たち」という単元を学習させるためには、いかにしたらいいか。この子どもたちに、社会に対する見方・考え方をいかにして身につけさせるか。学習意欲を持続させ、追求のめを育てるためには、どのようにすべきか等毎日の実践で直面する問題について改めて見直してみたいと考える。

## II 指導要領の目標と内容(4)について

内容(4) 「乗り物で働く人々は、乗り物の出発や到着の時刻を守りながら、乗客の安全な輸送に努めていることに気付かせる。」

この内容を、2年生の目標(1)働く人々の工夫と自分たちの生活とのかかわり、目標(2)働く人々の具体的な観察とその効果的な表現という2つの視点から見直すと、鉄道かバスを利用する乗客の輸送のうち、学区域で実際可能な方を選び、その具体的な観察を通して、乗客の確実で安全な輸送をするための仕事や仕事の分担、相互連絡、施設設備とのつながり等を発見させることであると言える。

しかしながら、2年生ではまだまだ観察力や学習意欲の面で、不十分な点のあることを考慮して、観察してきたことや、その意味するところを、子どもたちひとりひとりがどの程度つかんでいるかを教師が把握し、子どもたちにはその不完全さに気付かせるために、いかに効果的に表現させるかということが重要になってくる。

### Ⅲ 地域や子どもの生活・実態を生かした教材化

私の学校は、黒石市の中心からはなれた農村地域に位置している。従って、私鉄弘南黒石駅や商店街などに行く場合は、自家用車が自転車を使うことになり、公共機関としてはバス利用になる。子どもが買い物や塾に行く場合は、ほとんどがバスを利用している。

本校の2年生に「のりものではたらく人たち」を学習させるとなると、子どもの生活や願いを大切にすれば、当然「駅」よりも「バス」の方が身近であり経験も豊富であるから、「バス」を中心として単元構成をしたのである。

### Ⅳ 単元の学習指導案

#### 1. 単 元 のりものではたらく人たち

#### 2. 単元の目標

- (1) 乗り物で働く人々は、乗客のために乗り物の出発や到着の時刻を守りながら、乗客の安全な輸送に努めていることに気づかせる。
  - ① バスや電車などの乗り物を利用した経験や、乗り物の利用調べをもとに、自分たちの生活と乗り物で働く人々の仕事の関係に関心を持たせ、バスや電車で働く人々の仕事を見学しようとする意欲を高める。
  - ② 最も親しんでいるバスやバスの運転手の仕事を観察する計画を立て、観点をきめて見学させ、運転手たちは正確な発着や乗客の安全輸送に努めながら仕事をしていることや、車輛の点検・整備・洗車をする人々もいることに目を向けさせる。
  - ③ 電車や駅で働く人々の仕事を観察させ、安全で正確な運行に努めていることに気づかせる。
- (2) バスや電車や駅で働く人々の仕事を見せることにより、観察力を育て、調べてきたことを整理したり、発表したりできるようにする。

#### 3. 単元について

##### (1) 児童の実態

自家用車の保有率が高くなってきたので、以前よりはバスや電車などの乗り物を利用する機会が少なくなってきたが、子どもにとって最も身近な乗り物といえば、何とんでもバスである。しかし、登下校時毎日のようにバスを利用している子どもに聞いてみても、バスのことや運転手の仕事や苦勞などについては案外関心を持っていないし、目の前にある事実についても知らないことが多い。まして、時々しか利用しない子どもはどうだろうか。これは、彼等がバスや運転手のことについてわかってほしいからだとか、学習したくないからだということではなくて、自分の最も身近な生活そのものに目が届き、感じ、そして疑問をもって追い求めたいという気を持つ子に育っていないということである。

## (2) 教材について

知っているようで、実は知らないという子どもの実態がある。しかし、子どもは知識として整理されていないにしても、バスについて知っていることを調べてみれば、その内容は種雑多であることがわかる。

そこで、それらを教材の分析から3つの窓にわけて整理してみると次のようになる。

### ㊦ 社会機能・公共性の面

2年の単元内容から、この単元も交通運輸という社会機能の1つであり、交通機関としてのバスの公共性は欠かせないこと。

### ㊧ 営 業 の 面

会社企業のもとで働く上からも、乗客の安全輸送には大きな責任があること。

### ㊨ 労 働 の 面

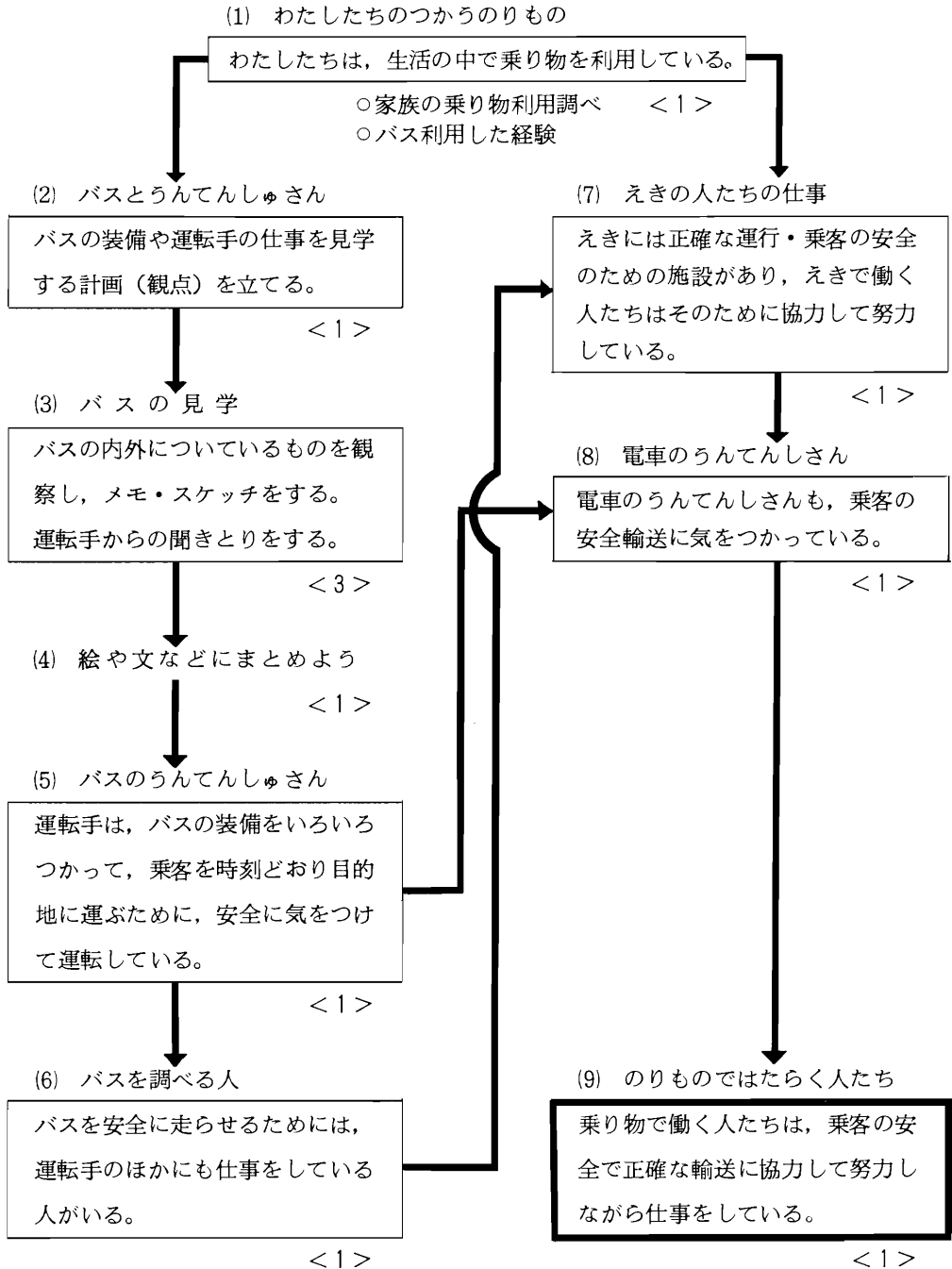
ひとりの労働者として、直接子どもの目にうつり、人間のふれ合いが行われること。

子どものいちばん目につきやすいのは、バスの装備や運転手であり、電車の装備や駅の人の仕事である。従って、それらを事実としてよく観察させ目を向けさせながら、メモ・スケッチ・聞きとりなどの取材活動が学習のスタートとなる。そして持ち帰った事実・事象をもう一度整理し、学習していく過程で、上記の㊦㊧㊨に示した社会的意味にも迫れるような子どもの目を、2年生としての発達段階に応じたもので育てていかなければならない。

## (3) 指 導 観

この教材は、社会科では欠かせない交通運輸という社会機能を学習内容として持っている。したがって、まず、バスの内外の観察や電車の駅の観察により、社会事象との出会いを大切にしたい。授業では、子どもがつかまえてきた事実・事象を資料化しながら、自分たちの生活とのかかわりにおいて、乗り物で働く人たちの仕事を職業として見させ、仕事の内容・工夫・苦勞について気づかせると同時に、その社会的意味についてふれさせたい。

#### 4. 単元の教材構造



※ < >内の数字は、時間数を示す。